

「清紫会」だより

- ◆第173回 平成三十年十一月十五日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二
〈提出作品〉市川茂子・銭湯の賑わい／林博子・ピッピピッ
- ◆第174回 十二月二十日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二
〈提出作品〉小野澤繁雄・大字柏崎／林博子・黄昏まで／松井淑子・名古屋行き
- ◆第175回 平成三十一年一月十七日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二
〈提出作品〉市川茂子・年越しのハプニング／林博子・門松たてて

無二の会短信

◆九死に一生を得たということであろうか。平成三十年は、入院、手術、治療で過ぎた半年であり、あとの半年は三人のヘルパーさんの交替介護のおかげで何とか生きていられたという情況だった。就労ならぬ、自由のきかない、まるで「収牢」とでもいうような毎日が続いた。でも二十年には、父の妹の糸子、親類の順子叔母、そして糖尿病だった母の三人が次々に七十九歳である世に旅立ち、あまりに突然だったので、意外の気持でいただけだった。母たちよりも一年長生きをしたのだからと感謝しながら、自分は悔いを残さないようにと覚悟を決めていた。終活として、老人会の役の引き継ぎや年賀状の準備に忙しい年末をおくり、夜も遅くまで頑張っていた。が、ついに翌三十年三月初めに体調をくずして緊急事態が訪れた。入院、検査の結果、右前頭部に腫瘍があり、頭蓋骨と脳の間の水疱のようなものがあるので切除することになって、病名を聞くと「側頭部円蓋部異型髄膜腫」とのこと。六時間に及ぶ手術が終了して、気がついたのは薄暗いベッドの上だった。ナースコールのやたらに鳴っている、その騒々しい音を聞きながら目が覚め、ああ生きているのだと実感したのが、今でも蘇ってくる。

池田桂一

◆年明けてまもなく、新聞の広告で、外山滋比古先生の待望の書き下ろしエッセイ集『忘れるが勝ち！』が出たとあった。その一週間後に刊行記念の講演があると知って申し込み、何年かぶりに先生にお会いできることを楽しみに出かけた。会場はブックセンターで、八十名ほどだった。先生は四、五日前に体調をくずしたと言いなながらも以前と変りなく、元気にお話しされたのでうれしかった。終了後、希望者には著書にサインしてくださいとあるので、最後まで待ってご挨拶してきた。

市川茂子

◆暮れに七十歳になりました。父がなくなった年齢から三年が経っています。父がみなかった風景をみることになるのか、と思います。このくらいの年よりは多く、シルバースーツに座るにもためらいがあります。ここきて右ひざを痛め、正座が好きで、座っている時間もあるので、よくありません。平たいところは苦もなく歩きますが、立居や階段とくに下りに痛みがあり、ここきて多くの先輩たちを思いやっています。

小野澤繁雄

◆雪に埋もれている山形もようやく春の気配が見えてきている。近くにある北堰という水路の水音が高く聞こえ出している。でも山は雪に覆われているので、秋に集落を賑わしたイノシシ被害は皆無である。イノシシ対策の一つとしてジビエ料理でも出したかどうかという話があつて町でも検

討したそうだが、食肉にするまでの施設設備、人件費、衛生面での配慮等々かなりの課題があるようである。

神村ふじを

◆昨年来、雨らしい雨が降らず、乾燥注意報も出される。狭庭の木木にも水分補給と何度か散水した。八重樫の蕾は仄かに紅を差し、紅梅の蕾は膨らんでゆく。健気に育ち、心身ともに凍えそうな私を励ましてくれる。

河村郁子

◆町内会の体操では、いつも最前列にかける。役員さんの説明や連絡がちゃんと聞きとれないから。でも良いことばかりはない。うしろの人達の顔や名前がおぼえられない。一人か複数かわからないが、面白い（良い）本だから読んで下さいと、廻し読み用の本を誰かが置いていくようになった。良いことを思いつく人がいると感心しながら、借りたことがない。それが元旦あけから『大家さんと僕』が廻し読み終わったのか、置かれっぱなし。ベストセラーらしいから借りてきた。エッセー集と思いきや読んでいたら、マンガだったので驚いた。マンガに明るくないもので。でも一気に読んで大いに笑った。世の中じゅうが知ってて自分一人だけ知らないことが無限にあることを再認識した。

河内愛子

◆今年の冬は、昨年より寒いように思います。果してそうであったのか、私がただ歳を取ったからなのかわかりませんが。人生の幕を下ろす日が、そろりそろりと近づいてきているのではと思ひ、終活を始めねばと思うこの頃です。あと一カ月もすれば、あのブラウニングの春が今年もやってくる、心待ちにしています。

谷垣満壽子

◆昨春、私たちの農産加工グループの大黒柱的存在だったOさんが突然の難病で亡くなった。また、事務の大半を担っていたNさんが、介護の仕事で病院に正規採用された。子育てたけなわで、私たちの会の賃金では生活が成り立たないと。残された七人は、にわかになつた。仕事を分担して何とか乗り切っている。冬の間は五種類の餅の製造に明け暮れている。各生協の注文数を予測して過不足なく作らなければならない。大変でも餅はやめることはできない。会を支える主力商品であるし、有機農業の仲間の餅米を適正な価格で買い取り、彼らに喜ばれてもいる。昨年十二月三十日、TPP（環太平洋経済連携協定）が発効した。消費者は食料が安くなると歓迎しているかもしれないが、小規模農家にとっては、農業はもうやめろと言われてしまうものだ。新野祐子

◆東京では、十二月下旬ごろから今日までの約一カ月近く、たまに曇る日はあるが、ほぼ晴天が続いている。気温も高く、最高気温が十度を下回る日も数えるほどしかないようだ。ことに私のうち

は、西日だが日がよく入り、午後いっぱい暖房が必要ないくらいである。東北の、ことに雪の多い地方にお住まいの方々には、申し訳ないようである。

松井淑子

◆三十年前、今住んでいる家に建てかえる時、古い家の庭に亡父の愛した柿の木があった。ゴミとして処分するのは、家族皆こころが痛むので、狭いが新しい庭に何とか移植してもらった。幹は裂けて二本の木のようになっている。申し訳程度に、毎年実がなって野鳥たちを喜ばせていたが、昨年は駄目だった。今年も多分駄目だと思ふが、せめて一つでも二つでも、鳥の分だけでも実ってくればと願っている。

丸山弘子

◆映画『ボヘミアン・ラプソディ』を二度観た。一度目はひとり、二度目は息子・ハルト。世界的人気ロックバンド「クイーン」のボーカルで、一九九一年に四十五歳の若さでこの世を去ったフレディ・マーキュリーを描いた伝記ドラマである。劇中にはフレディ自身の声を使用した楽曲が次々と流れる。伝説のチャリテイコンサート「ライブ・エイド」の場面はまさにコンサート会場さながらで、スクリーンの向こう側の情熱がこちらの心にダイレクトに届く。帰り道、息子と二人、上気した頬でフレディについて語り合う。私が思う以上に大人になってきているハル。二人に良い思い出をもたらしてくれたフレディに感謝した。

山内裕子